

# 「さわる展示」の深化と応用② —観光のユニバーサルデザインを考える

文  
廣瀬浩二郎

共同研究 ● 触文化に関する人類学的研究—博物館を活用した“手学問”理論の構築（2012-2014）



オースティンの彫刻庭園にて、作品「Bambino su Cuscino」を触察  
(2013年12月)。

## はじめに

2013年度はプロジェクトの代表者である廣瀬が在外研究で米国に長期出張したため、研究会を1度しか開くことができなかった。2012年度のプロジェクト開始以来、本共同研究では「ユニバーサル・ミュージアム理論の他分野への応用」を目標の1つとして掲げている。「さわる展示」の実践的研究を通じて鍛えられたユニバーサル・ミュージアム論をさらに発展させるために、2012年度には「高等教育のユニバーサルデザイン化」という課題に取り組んだ。この研究会の趣旨を踏まえ、2013年6月には廣瀬が中心となって、「京都大学バリアフリーシンポジウム」を実施した。本シンポジウムの成果報告書は2014年末に刊行される予定である。

2013年4月～7月には、共同研究メンバー有志の協力も得て、体験プログラム「瞽女文化にさわる」を国立民族学博物館（以下、民博）で開催した。この体験プログラムは、「さわる展示」の新たな運用スタイルとして、今後の展開が期待できる。「瞽女文化にさわる」の概要については、拙論「ユニバーサル・ミュージアムの構想」（2014年）で報告している。

さて、2013年度の最初で最後の研究会では、「観光のユニバーサルデザイン」に注目した。このテーマに関しては、2014年度も考察を続ける予定である。本稿では廣瀬の在外研究中の経験を紹介しつつ、「観光のユニバーサルデザイン」に関する私論をまとめてみたい。以下の試論は、2014年度の研究会の議論を進めるための基本資料となるものである。

## 彫刻庭園と触文化

米国滞在中、私は多くの博物館・美術館を訪問した。その中で印象に残っているのが2つの彫刻庭園である。テキサス州オースティンのウムラウフ彫刻庭園美術館、およびルイジアナ州のニューオーリンズ美術館の彫刻庭園で、屋外に展示

された多数の彫刻作品に自由に触れ、「モノとの対話」を楽しんだ。もともと、私は彫刻の触察が大好きである。立体作品に思いっきり“さわる”ことを好むのは、単なる個人的な趣味かもしれない。しかし、私が提唱する「触文化」（さわらなければわからないこと、さわって知る物の特徴）を実感できる素材として、彫刻作品が最適であるのも間違いないだろう。

「触文化」の3要素として、私は質感・機能・形状を挙げている。つるつる・ざらざらなど、作品の手ざわりは、目で見るだけではわからないことの代表である。重さや温度も、広義の質感に含めることができる。次に、機能は動き、もしくは使い方などと言い換えると理解しやすい。現代アートでは体験型の彫刻作品が増えており、音を鳴らす、座ってみるなど、身体を通して鑑賞する機会も多い。

最後に、形状は視覚的にもとらえることが可能である。だが、目で見る場合は一方から情報入手に偏ってしまう。触察の特徴は、前後・左右からパズルのピースを組み合わせるように、まんべんなく“さわる”点にある。彫刻庭園の触察ツアーでも、作品の裏側や底面をじっくりさわった私が、「こんな所に○○がある！」と、意外な発見をし、同行の見常者を驚かせるケースがしばしばあった。

「触文化」を味わう手法として私が奨励するのは、「大きくさわる」「小さくさわる」「全身でさわる」の3つである。巨大なオブジェを触察することを例として考えてみよう。まず、両手のひらをダイナミックに動かし、全体の形を把握するのが「大きくさわる」。次に、指先に神経を集中し、細部の構造や精密な細工を探るのが「小さくさわる」。最後に、オブジェに抱き着き、作品そのもののエネルギー、そしてそこに込められた作者の思いを身体で感じ取るのが「全身でさわる」である。

大小さまざまな作品が集められている彫刻庭園では、3つの触察方法を思う存分に駆使し、「触文化」の醍醐味を満喫できるのが魅力といえよう。オースティン、ニューオーリンズの温暖な気候は、私の触察ツアーの解放的な雰囲気を助長した。ミュージアムの館内の落ち着いた環境で触察を楽しむのもいいが、屋外の空間の広がり、さわやかな風が皮膚感覚を刺激し、“さわる”本能を呼び覚ますのは確かである。彫刻庭園は博物館と街、展示と観光を結びつける貴重な文化施設、ユニバーサルな実験場と位置付けることができるだろう。

## 触文化が観光の未来を拓く

一般に、私たちの実生活から空間的・時間的に離れた事物を「目に見える形」で展示するのがミュージアムである。民博は世界各地の文化を紹介するために、人々が作り、使い、伝えてきたモノを収集している。日本人が気軽に海外旅行に出る豊かな時代の到来、多種多様な視覚情報に容易にアクセスできるインターネットの普及により、民博をはじめ、全国の博物館の入館者数は伸び悩み、どこも苦戦続きである。本物の非日常・異文化体験への期待（＝海外・国内の観光客の

増加)と、手軽な非日常・異文化体験の飽き足りなさ(=博物館の来館者数の減少)は表裏一体といえるのかもしれない。

コンパクトにまとめた博物館展示を拡大すると、自国(自己)・他国(他者)への旅、すなわち観光になる。逆に、短時間で効率よく観光できるために工夫されたのが、博物館展示であるともいえるだろうか。私たちは、「さわる展示」が視覚偏重の従来の博物館を改変する起爆剤になると主張してきたが、同様に観光に「触文化」の要素を加えることにより、新たな世界観・人間観を導き出せるのではないかと信じている。以下では、米国の彫刻庭園における私の触察体験から「観光のユニバーサルデザイン」につながる3つのポイントを抽出し、簡単に解説してみたい。

**1. 能動性**: 視覚障害者が単独で博物館訪問、観光・散策することは難しい。彼らの安全な移動を保障するためには、家族・友人・ボランティアなど、見常者の目と手によるサポートが必須である。つまり、視覚障害者が自分のペースで自由に行動する機会は限られているということになる。彫刻の触察は、視覚障害者が自らの意思で身体を動かし、気の向くままに作品を“さわる”ことができる貴重な場を提供する。受動的に情報を入手するだけでなく、能動的に手と頭をフル活用し、情報を組み立てていくのが触察の本質である。見常者は「好きな時に、好きなように」行動できるありがたさを普段あまり意識していない。一方、視覚障害者は日ごろ受動的になりがちな(ならざるを得ない)分、能動性の大切さを熟知している。「触文化」を媒介として、見常者に能動性の意義を再確認させるのは、視覚障害者の役割だといえよう。

**2. 身体性**: 触察は身体全体を動かす行為である。1つの作品の触察が終わると、彫刻庭園内を歩き、次の作品へと移る。歩行・移動も身体を活性化する上で重要である。鳥の声、花の匂い、風の流れなどを楽しみながら彫刻作品を鑑賞するのは、ストレス解消にもなる。身体の解放が、精神の解放にリンクしているのはいうまでもない。彫刻の触察を重ねるうちに、米国人ガイド(学芸員)も私もすっかりリラックスし、会話が弾むという経験を何度もしたことがある。私は英語が不得意だが、どうやら触覚によるモノとの対話には、<sup>その</sup>者との対話(触れ合い)を促す力も内包されているようだ。「目で見ること」に頼らない視覚障害者は、「感覚の多様性」に敏感である。彼らの触察は、「目に見えないもの」にフォーカスする観光の21世紀的な可能性を切り開くヒントを与えてくれるに違いない。

**3. 選択性**: 能動性と身体性に立脚する触察は、常に真剣勝負である。手を四方八方に伸ばし、頭の中に像を描く作業

は精神的充足をもたらす反面、疲労を伴う。単純な話で、大きな彫刻作品の全体を触察するために、背伸びしたり屈んだりすれば、足腰への負担が大きくなる。彫刻庭園に行くと、ついつい欲張って、あれもこれもさわりたくなるが、實際には10点も触察すれば疲れてしまう。集中力を長時間持続せることは困難である。だから、触察ツアーを充実したものにしようとすれば、どんな順番で、何をどう“さわる”のかを慎重に検討するのが重要だろう。

視覚による見学・観覧は「より多く、より速く」が特徴だが、触察は「より少なく、よりゆっくり」が原則である。情報の量ではなく質にこだわる姿勢が「触文化」の真骨頂といえる。情報を選択する主体は、当事者にあることも忘れてはならない。彫刻庭園の触察ツアーでは、先にどんな展示資料があるのかを説明してもらい、来館者本人が“さわる”作品を選ぶのが望ましい。大きさ・素材・形などのバリエーションを考慮し、ミュージアムの側で触察ツアーのモデルプランの選択肢をいくつか提供するのもいいだろう。

昨今、自然体感型の観光ツアー、五感を活かす「まちあるき」が各地で試みられている。また、障害者の参加を想定したバリアフリー旅行の企画も見られるようになった。しかし、それらはまだ個々の事例が「点」として積み上げられている段階である。私は「観光のユニバーサルデザイン」を具体化するための指針として、「能動性」「身体性」「選択性」の3つを提出したい。この3つを兼ね備えた観光は、視覚障害者のみならず、誰もが楽しめる非日常・異文化体験となるだろう。共同研究の最終年度の課題は、「体験から理論へ」である。私以外の

視覚障害者の「視覚に依拠しない」旅行術、あるいは各地の先進的な取り組みにも学びながら、「観光のユニバーサルデザイン」の本格的なガイドライン確立に向けて研究を続けていきたい。

#### 【参考文献】

廣瀬浩二郎 2014 「ユニバーサル・ミュージアムの構想」 黒沢浩編『博物館展示論』講談社。

#### ひろせ こうじろう

国立民族学博物館民族文化研究部准教授。筑波大学附属盲学校から京都大学に進学。専門は日本宗教史、触文化論。視覚に頼らない知的探究の技法として、“手学問”を提倡。主な著書に『さわる文化への招待』(世界思想社09年)、『さわっておどろく!』(岩波ジュニア新書12年)などがある。